

新しい林業「森林業」は、
多角的なビジネスアイデアで
山林を運営します。

経済的な価値が失われ、
荒れたまま放置されている
スギやヒノキの経済林は
土砂災害を引き起こす懸念もあり
日本各地で課題になっています。

そんな山林を救う技術は

日本が誇る、本物の森づくりです。

さあ、あなたの山にも

イノベーションが起こる時代が

やってきました！

見逃すな！

日本森ジャー

一緒にやり-



「里山」をゼロからリデザインし
現代版へとアップデート

ZERO BASE

里山

Nature Education

博士の知識と受け継ぐ技術で 里山をリデザインし、運営します。

林学博士である西野文貴氏は、これまで調査した場所が国内外を含めて1000カ所以上にも及びます。その中には皇居や明治神宮など数少ない自然環境も含まれています。これらの調査経験と豊富な知識を活かし、新たな森づくりのための植生プランニングを提案し、そしてこれらの知見を次世代に伝えることに一生を捧げています。

最近では、ヨルダン、インド、中国、フランスを訪れ、日本が世界に誇る、森づくりの技術である「本物の森づくり」を指導しています。国内においても、森づくりにとどまらず、小学生を対象に定期的な植物の授業を行い、環境教育に積極的に取り組んでいます。

また、本プロジェクトは、中小企業庁主催の第3回アトツギ甲子園で最優秀賞の中小企業庁長官賞を受賞し、192人の頂点になりました。



林学博士 西野文貴 FYMITAYA NISHINO

- 里山 ZERO BASE 代表
株式会社グリーンエルム 代表取締役社長
(2023年10月より就任)
- ・東京農業大学森林総合科学科 卒業
 - ・東京農業大学大学院農学研究科林学専攻(博士後期課程)修了
林学博士取得
 - ・経団連自然保護協会 東北復興支援 環境教育授業講師
 - ・東京都神社庁の実習を受講し、試験に合格し「直階」を授与
 - ・日本緑化工学会より研究奨励賞を授与
 - ・公益財団法人鎮守の森のプロジェクト 技術部会員
 - ・中小企業庁主催『アトツギ甲子園』2023年グランプリ受賞
 - ・ビジネス誌『Forbes JAPAN』2023年4月特集掲載
 - ・ヨルダン、インド、中国、フランスにて森づくりに指導中



森づくりの真髄。

革新的な技術と森の遺伝子農場が 「本物」の森をつくり出します。

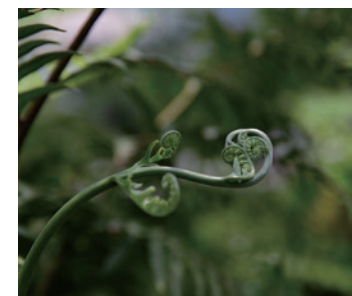
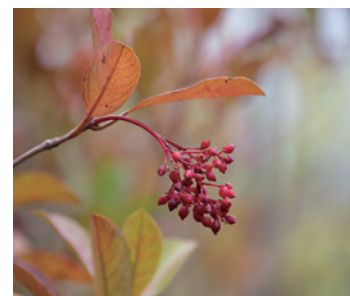
「本物の森づくり」それは、限りなく自然に近い森づくりです。

「4000万本の木を植えた男」として異名をもつ、横浜国立大学名誉教授宮脇昭先生（2021年逝去）が約50年前に提唱したものです。潜在自然植生に基づき、10～20種類ほどの土地本来の植物を、混植密植するという方式です。

『里山 ZERO BASE』を運営する株式会社グリーンエルムは、西野文貴の父である西野浩行が宮脇先生のもとで研究員をした後に、植生設計・苗木生産の会社として設立し、宮脇先生の森づくり研究と共に歩んできました。創業以来、種子から植物を発芽させ、貴重な在来種を含め累計500種類もの草や木を600万本育ててきました。

圃場には、常時200種類以上の苗木を扱っています。これらの植物は主に、森林再生や研究、また植物の特性を活かした製品づくりに役立てられてきました。現在では「森の遺伝子農場」と呼ばれています。日本には約5,000種類の植物が自生しています。世界でも多数の固有種が分布していますが、公園緑化などに用いられる植物はごくわずかに過ぎません。私たちの「森の遺伝子農場」には、これらの固有種も含めた数多くの植物が育成されているのです。

取引先例：公益財団法人国際生態学センター、神社本庁、
公益財団法人鎮守の森のプロジェクト、大成建設、YAMAP、他



1950年頃、戦後復興と共に木材需要が急増し「**拡大造林政策**」が進みました。
ところが、1970年には輸入材の影響で国内の**木材価格が暴落**しました。
林業は、**スギ・ヒノキの材木だけで収益を得ることは難しく**なりました。

1950年頃、戦後復興等の理由から木材需要が急増しましたが、その供給に追いつかないため、政府は「拡大造林政策」を進めました。

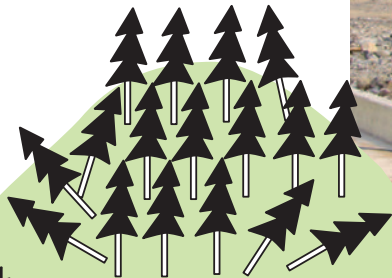
その結果、現在のスギ・ヒノキの森林が急増しましたが、1970年には安価な外材が輸入されたこともあり、日本の林業経営が難しい状況へと追い込まれました。高度経済成長期を通して、一次産業の一つである林業や里山林が経済的な価値を失い後継者が不足し、急増したスギ・ヒノキの人工林の維持管理に手が回らなくなりました。

現在、山林は国土面積の約7割、里山はその内の約4割を占めますがほとんど経済活用できていません。現状ではスギ・ヒノキの材木だけで収益を得ることは難しく、山林は放置されているか、林業においては国からの補助金でなんとか赤字を回避している状態です。

また、放置されたスギ・ヒノキの単植林は大雨による土砂災害を起こしやすくなっています。

『里山ZEROBASE』は、この日本国土における大きな課題を解決しようと立ち上がりました。

放置された経済林





放置されたスギ・ヒノキの人工林が抱える、4つのネガティブ。

① 放置による表層崩壊（土砂くずれ）

台風や豪雨による山地災害では、多くのスギ・ヒノキが流されています。間伐などの手入れが行き届いていない人工林では、水が地中に浸み込みにくく根っこが浅くなります。また、他の樹種と根っこが絡まないことで表層崩壊が起こりやすくなります。

② 生物多様性の低下

自然植生に配慮しない樹種を単一的に植えた人工林は、自然の質が低下し、生物の多様性が失われていきます。

③ 水を蓄える機能の低下

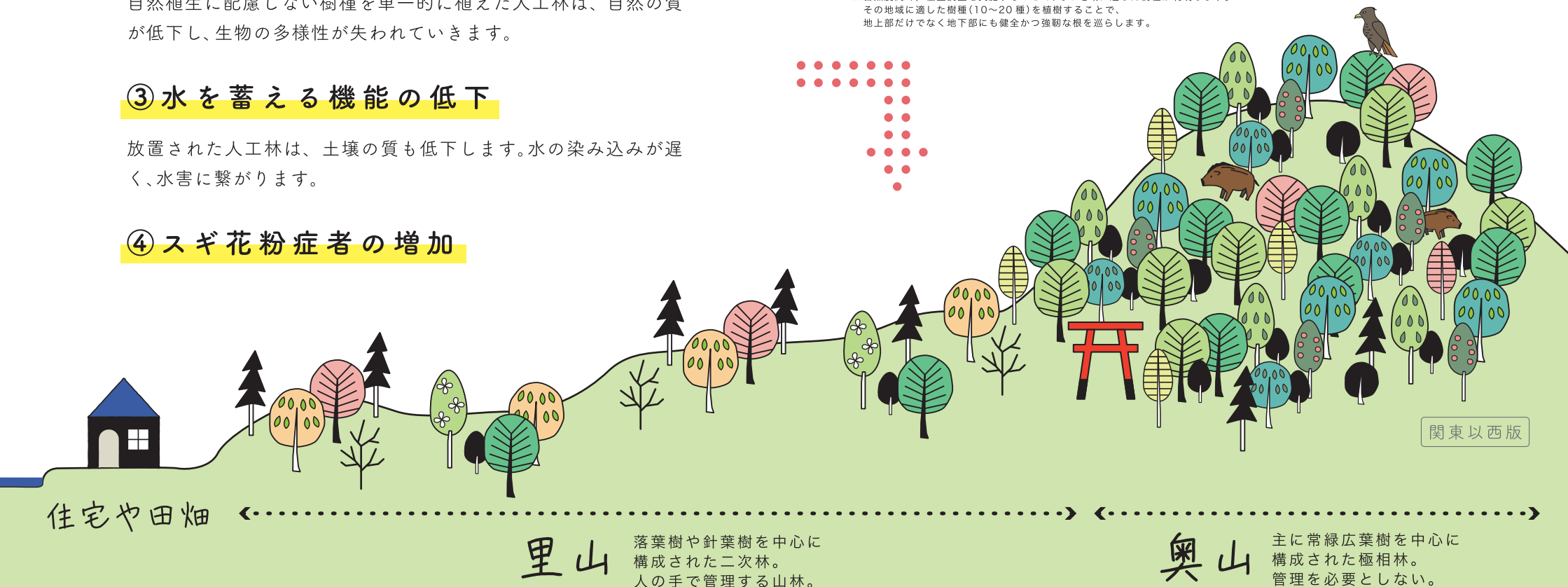
放置された人工林は、土壌の質も低下します。水の染み込みが遅く、水害に繋がります。

④ スギ花粉症者の増加

解決

まずは、荒れた山林を
人と自然とが共存共栄するための里山と、
人の管理を必要としない
自然度の高い※奥山へと整備します。

※自然度高く／植生調査を実施することで、その地域に適した樹種が判明します。
その地域に適した樹種（10～20種）を植樹することで、
地上部だけでなく地下部にも健全かつ強靱な根を巡らします。



住宅や田畑

里山

落葉樹や針葉樹を中心に
構成された二次林。
人の手で管理する山林。

奥山

主に常緑広葉樹を中心に
構成された極相林。
管理を必要としない。

関東以西版

運営敷地合計 36ha

『里山 ZERO BASE』のモデルフォレストは、 千葉県君津市と大分県国東市にあります。

自然を守りながら産業の発展を促す新しい林業「森林業」は、従来の林業の領域を超え、多角的な収益事業により経営されています。

最新の学術的知見に基づき、山林の豊かな資源を見だし、そして有効に活用するための技術開発に取り組んでいます。

また、森づくりは、自分の寿命を超える時間を要するため、私たちは将来を見据えた長期的な視野を持ち、次世代に技術や知識を継承することが欠かせません。



日本は**森づくりの先進国**です。
限りなく自然林に近い森へと
再生させる先進的な技術があります。

日本には、わずか0.06%しか自然林が残っていません。世界全体でも同様の状況が広がっています。しかし、日本にはまだ自然林が多く残されている場所があります。それが、神社・仏閣の周りに広がる「鎮守の森」です。これらの場所では、さまざまな信仰心や時代背景により、周囲の木々が多くが切られずに残されてきました。

このおかげで、豊かな生物多様性とあらゆる災害に対する強靭性を備えた、潜在的な自然植生に基づいた森の設計図が描けるのです。

森づくりの鍵は「植生調査」にあります。日本では、この重要な調査を実施できる専門家はわずか10名程度しか存在しません。当社は、神社本庁などと協力し、鎮守の森を保護・再生し、後世に繋げるための取り組みを行っています。また、これらの活動を『里山のZERO BASE』にも活かしています。

本プロジェクトの成功により、日本の森を含む歴史と伝統の保護に寄与する確信があります。さらに、地方から発信することで、市町村単位でこれまで当たり前とされてきた森林や自然の見方が変わり、自然資本としての価値を認識することができるでしょう。放置されていた地方の森林自体が価値を持ち、地方のアドバンテージを高めることも、このプロジェクトの狙いです。

自然植生
減災の森

生物多様性

森づくり
コンサル業



約8年後



約20年後

山の価値はもはや木材だけにとどまりません。

現代では、木を植える体験や自然を学ぶことにも価値があるのです。

企業による CSR 活用

カーボン オフセット

このプロジェクトは企業の CSR 活動に活用することができます。例えば、環境保全への貢献として、植樹活動にご参加いただけます。1 企業につき 30 本の木を 30 万円から植えることができ、その証として植樹証明書を発行します。植樹から 3 年後には、地域本来の動植物が少しずつ増え、植樹から 30 年後には樹高約 30 メートルの森に成長することが期待されます。

また、モニタリングを行い、二酸化炭素固定吸収量なども算出して森の評価を行います。さらに、森林業を真似てもらうための講習会を全国に開催し、ノウハウを広める取り組みも行っています。企業の協力を得ながら、持続可能な森づくりと環境保護に積極的に貢献していきます。



環境教育
自然享受

人と自然の距離を縮め、自然を身近に感じることで環境問題への関心を高めていただくために、地域の小中学生が参加できる実践的な環境教育を展開しています。将来的には全国各地で「自然林の作り方」のような教科書を作成し、次世代に知識を受け継ぐことを目指しています。

また、果実や木材の収穫、キャンプなど山全体を楽しむことができるよう、大人も交えて皆でつくる山林を目指しています。これにより、地域の方も楽しんで参加できる場を提供し、自然とのふれあいを通じてコミュニティを形成していきます。



プロダクト
開発

間伐材・材木利用

『里山 ZERO BASE』が提供する商品は、EC サイトを通じて販売されます。商品を購入すると、売上の一部は千葉県君津市と大分県国東市にある山林の環境保全活動費や地元の子どもの自然教育費として活用されます。

商品コンセプトには、山の課題を広く知らせることや、樹種の特徴を生かしたプロダクトの開発に注力していきます。



“切り捨て間伐”を活用した
ヒノキのアロマウォーター。
企業ロゴが名入れできるノベルティ向け商品。

ノウハウの公開

一緒に山を楽しもう！

『里山 ZERO BASE』は全ての技術を公開していきます。

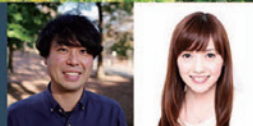
あなたの山にもイノベーションを！

ラジオ番組『Sato Note』
毎週日曜日朝 8:00-8:30

聞き逃し
配信中

里山 ZERO BASE
コラボレーションラジオ
『Sato Note』

DJs: 西野文貴、高橋万里恵



interfm
Find Your Colors

RADIO



HP
EC



里山 ZERO BASE

お問合せ: satoyamazerobase@gmail.com

運営: 株式会社グリーンエルム

大分県速見郡日出町大字川崎字辻の下 3125